

10月26日(火) かけがえのなさ(交換不可能性)は合意しても消えないか

作成者: 想田 瑞恵

檜垣先生(以下H): 前回の想田さんのまとめについてですが、「対話におけるかけがえのなさは自他の区別がないこと」というのは誤解がある気がしますね。栗原さん、どう思いましたか。

栗原さん: 対話で人と同じことを言っても、それはその人のかけがえのなさがなくなるということではないと、前回確認しましたよね?

想田(以下S): 確かにしました。それを受けて、「独自性」という要素は消えていると思われる対話のかけがえのなさにおいて、交換不可能性をどう理解するか考えたとき、「自他の区別がない故にそもそも交換が不可能である」ということを言っているのではないかと、思ったわけです。そういうことなら話はわかりますが、という感じです。

H: かけがえのなさという日本語をどう取るかが問題でしょうね。捉え方によっては、確かに個性と変わらないかもしれませんが。「人格には Würde があり物には Preis しかない」とカントが述べる箇所と関連させて「かけがえのなさ」を考えていたのですが、『道徳形而上学の基礎付け』だけでなく、『純粹理性批判』における「統覚の Einheit」とも密接に関係してくる問題でしょう。確かに想田さんの言っていることはわかります。対話で言うかけがえのなさは、「全部・全体と同じだから他に替わるものはない」という意味か、ということですね?

S: その通りです。

H: 難しい問題で、それこそ何年もかけて研究すべきことですが、今言えるとしたらこういうことでしょうか。かけがえのなさという言葉を使いますが、あなたに子どもがいたとして、その子どもを失ってしまったとします。その後、その子のクローンを同じように愛せますか? それでかまわないと思うのでしょうか。

S: おそらくそれでは駄目だと感じると思います...

H: その駄目と感じたことに根拠はないということですね。

S: 今の話はどのようにつながるのでしょうか。かけがえのなさとは、そうしたクローンでは駄目だという気持ちのことだ、ということでしたら、かけがえのなさで個性を理解したとしても、事態は変わらない気がするのですが。

H: かけがえのなさとは個性は別でしょう。クローンは失った子どもとまったく同じ内容を持つわけですから。

S: 相対的個性としては確かにそうでしょうが、失ったその子どもにしか持ち得なかった独自性があるから、クローンでは駄目だと感じるのではないのでしょうか?

H: その独自性は人間に理解できる内容としての個性とは違うでしょう。「かけがえのなさ」という言葉で、内容として表現される「個性」とは別の、何か説明できない、直観されるだけの独自性のようなものを表現しようとしているのです。

S：そういうかけがえのなさが、まさに個性のことだと思うのですが。「他のものとは違う」という他との比較によらない個性のことです。

H：そうした個性をかけがえのなさとして理解する、ということならいいでしょう。ただし、個性ということがどこまで問題になるのかは、哲学史の検討が必要です。ギリシア哲学では、個性という考えは出てこなかったわけですからね。相対的でない個性が出てきたのは、キリスト教からでしょう。そうした個性になら内容も出てきます。ただし、人間にとらえられるかぎりでのかけがえのなさの場合は、内容があっては駄目です。

増田さん：でも、そうしたかけがえのなさも錯覚かもしれないですよ？例えば、子どもを失った事を知っていれば、クローンを拒絶するかもしれないですが、ある日突然、予告もなしに子どもとクローンが交換されたとしても、僕は交換されたクローンをそれまで通りに愛すると思うのですが。それに、かけがえのなさというより、クローンであるという性質でもって、クローンを拒絶することがあるかもしれません。

H：確かに、かけがえのなさを錯覚として考えることもできるでしょう。けれど、ここで問題にしていることは、かけがえのなさのような絶対的な次元では、個の内容は問題にならないということですね。ただ、ここまで言って思ったのですが、Würde を「かけがえのなさ」と考えるのは違うかもしれないなと思いはじめました。少なくとも、カントの言う Würde と、さっき亡くした子どもの例のかけがえのなさ、絶対的個性は、相対的個性とは全然違うものだということですね。価格がないということは比較を絶している、ということですから。

S：相対的価値が Preis であって、それとは違い比較を絶しているから、取替えがきかない、つまり、かけがえがない、ということですか？

H：比較を絶しているからかけがえがないと、即つながるかどうかは問題です。もちろん取替えはききませんが、その意味もまた問題になってきます。とりあえず、ここでは、人間に比較されるような個性には意味がないということ。そして、他人と違うことを言って自分の個性を際立たせようとするのはおかしいのだということ。あとは、合意してもかけがえのなさは消えないというのは、当然のことだと思っていましたが、気をつけないといけないことのようにですね。

S：合意してもかけがえのなさは消えないというのは、もちろん当然のことではないとして、本当に消えないのかまだ納得できていないです。人と違うことを言って自分を際立たせようとするのは、相対的個性に振り回されているからで、方向性としておかしいというのはなんとなくわかったのですが。対話は違いを確認する場ではないし、かけがえのなさは交換不可能性ではないということですか？

H：もちろん、対話においては違いも確認されますし、かけがえのなさは交換不可能性のことでしょう。

S：ですが、亡くした子どもは交換不可能な個として現れていますよね？

H：どうして「個として現れている」なんて言えるんですか。言えないでしょう。

S：えっと、「その子でない駄目」というのは、個が現れているということではないのですか？

H：西洋哲学の言葉使いから言っても、個とは、個別で内容を持ったもののことでしょう。何度も言うようですが、かけがえのなさに内容があっはいけません。

S：そこがちょっと。内容を完璧に度外視するかけがえのなさで良いんでしょうか。やはり、内容を持った個というものも問題にすべきだと思うのですが。

H：けれど、内容を持ったらかけがえのなさは言えませんし、想田さんのいう個には意味がないというか、内容がなくて何を指しているのかわからないのですが。

S：それは、内容があったらかけがえのなさとしての個を言うことはできないから、ということではないのですか？

H：増田さんが言うように考えるのだとしたら、真の個性も錯覚でしょうね。これ以上考えるなら、ここからは対話ではなく、研究の領域という気がします。実際にテキストを使わないと、これ以上はちょっと無理でしょう。例えば、『個の誕生 キリスト教教理をつくった人びと』（坂口ふみ、岩波書店）が参考になりそうです。後は、キルケゴールの単独者の考えでしょうか。この授業でまとめることとしては、対話では違いを確認するけれど、人と同じことを言っても尊厳はなくならないということです。人と違うことを言えるかどうかは問題ではありません。若い人のコミュニケーションは、どうもその辺りがねじれていて、突出しないようにしつつも違うことを言わないといけないと、ストレートでない。こういうところでは同じにして、こういうところでは独自性を出す、というような枠が前提されているでしょう。そして、そうした共通の枠を前提しない人はモンスター扱いする。それでは、本当の意味での自分の意見にはならないですね。もちろん対話においても、共通の枠というものを前提していますが、でも、それに依存はしていない。だから枠が壊れることを怖いとは思わないし、発言するたびに「場の空気を壊さないだろうか」とびくびくすることもない。けれど、そちら側は、と言っていいのかわかりませんが、「ナンバーワンではなくても誰もがオンリーワンである」という共通の枠、つまり空気が壊れたら困るんじゃないですか？

S：そうですね。「誰もがオンリーワンである」という共通の枠でかけがえのなさを確保しているわけですから。ただ、共通の枠として相手に要求するものは、「誰もがナンバーワンではなくオンリーワンである」ではなく、「誰もがナンバーワンかつオンリーワンである」ということです。オンリーワンしか要求しないのだったら、自他にかけがえのなさを認めるそちら側、と言っていいのかわかりませんが、対話と変わらないことになってしまいますから。重要なのは、オンリーワンということで、ナンバーワンであることも認めろ、と要求しているということです。もちろん競争相手なきナンバーワンですが。

H：「誰もがナンバーワンかつオンリーワンである」という要求はしていないでしょう。前回永延さんが言っていたように、その主張では本来矛盾するはずなのに、ごまかしているわけですから。どういうふうにごまかしているかについては、想田さん自身が前回のまと

めで上手くまとめていましたよね？オンリーワンの主張は、子どもが社会性を獲得していく様子と似ています。もちろん自己中心的な社会性ですが。共有している空気は「誰もがナンバーワンではなくオンリーワンである」というものなのに、どこかで突出したいという意識がある、というのが、前回の永延さんの指摘でした。今問題にしたいのは、そういう空気に依存して、考えの中身だけでなく立場も同じであれ、と要求しているのではないか、ということです。つまり、ある価値観を共有していて、その価値観を共有する人同士がグルになっている状態です。

S：対話も、普遍的なものを求める人が同志となっているわけですから、グルになってやっているようにみえてしまうのですが。

H：確かに、普遍を目指すという意味で、理性的有としてグルになっているとは言えるでしょう。カントも目的の共同体ということは前提しています。けれど、目的と言っても、想田さんがこれまで問題にしてきたような目的とは次元が違いますよ？そうしたものも前提しようとしなかったのがニーチェなのかなとも思いますが、彼はおかしくなっていましたからね。永劫回帰でどこまでやれるかということでしょう。

## 【 まとめ 改めて対話とは何か 】

**対話とは、異質な他者との関わりである。そこでは、他者が人格として発見されている。**

檜垣先生は、異質な他者と本当に関わっているかどうかを常に問題にし、目的に依存しない対話という関係を重視している。中島義道さんも「大人になる君へ」(2009.4.16.朝日新聞)で、異質な人々を切り捨てるのではなく、大切に交流することを言っている。しかし、異質な他者と関わるというそんな辛くて困難で面倒なことを、なぜする必要があるのか、ずっと疑問だった。「自己肯定感を得るため」や「テキストを深く理解するため」や「自身が成長するため」のように、目的を設定して、異質な他者と関わることを理解しようとしたが、それは目的を強調しすぎていると言われてしまった。

そう言われても、目的がないと対話というものは説明できないだろうと思っていたが、演習とつなげることで、ようやくこの指摘に納得できたと思う。演習は、人間の弱さと不純と悪性というカントの原罪解釈についての解説であった。人間は弱いから何をなすべきかわかっても、インセンティブがないと行為できない。そのため、道徳的行為をする理由を持ち出して行為を不純にしてしまう。そうした理由(社会的賞賛や利得や自己満足などが得られる)も、最初は、道徳的行為の付随物だったが、そのうちにそちらがメインになってしまい、それが得られる限りにおいて行為することになってしまう、ということだった。道徳的行為の大前提は、他者を手段としてではなく人格として扱うことだと思う。あるいは、どんな状況であっても、他者を手段ではなく人格として扱うことが、道徳的行為だと言えるかもしれない。ゆえに、異質な他者(人格)と関わる対話を、それをする目的

(理由)から説明してはならないのだ。それをすると、相手も自分も人格ではなく手段となってしまう、対話にならない。自己肯定感やテキストの深い理解などは、あくまで結果であった。目的もないのになぜ異質な他者と関わるのかと思っていたが、むしろ逆で、目的がないからこそ、相手や自分は人格として、道徳的な価値を持つ。このように、対話は道徳のレベルで理解されねばならない。コミュニケーション術のように、それをする目的が問題となる時は、自分も相手も目的達成の手段である。対話はそうしたものではないというところで、相手と自分の人格を尊重すべきという道徳の話になり、ここから対話は始まるのだ。

### **対話における対等性が、かけがえのなさ(交換不可能性)のことである。**

独自性(個性)が価値を持つのは、普遍を目指そうとする限りにおいてのみである。普遍という誰もが納得する意見を求めるならば、100人中たった一人が「納得できない」と反対意見を述べても、普遍の中には当然その一人もいるのだから、その一人を無視しては普遍に到れない。ゆえに、その一人の意見も耳を傾けるべき価値をもつ。けれど、この価値は、自分のみが際立っているということではない。むしろ、そう考える限り、かけがえのない価値を理解することはできないだろう。かけがえのない価値を持つとは、多数決なら切り捨てられるオンリーワン(独自性・個性)も、普遍を目指そうとする限り、他の99人と同じ価値・同じ重さを持つということだ。つまり、多数派であることや身分や地位が価値なのではなく、自分だけに価値がある(特別)のでもなく、100人の意見はそれぞれ同じだけの価値を持っている。こうした普遍を目指す対話における対等性が、すなわち、かけがえのない価値である。普遍は、「誰にでも承認される」ものなので、他でもないこの私にも承認されなくてはならず、その意味で私は交換不可能な存在だ。つまり、私は、普遍の一員として対等であり、交換不可能ということである。